

# 孤立量子系での 「平衡」への緩和の 時間スケール

田崎 晴明

Sheldon Goldstein  
原 隆

2014 年 3 月 11 日

第 2 回 統計物理学懇談会

# どういふ話をするか？

## 背景

マクロ系の平衡状態を単一の量子力学的純粋状態で記述できる

(しかも、そういう純粋状態はありふれている)

## ここで考えること

孤立した量子系における純粋状態のユニタリ一時間発展によって平衡状態への緩和を記述し、緩和の時間スケールについて考察する

# 平衡状態について

## 基本的な考え方



# 平衡状態 マクロな視点

孤立したマクロな系の状態は、平衡状態に緩和する



例：純物質の系

## 平衡状態

マクロな時間変化なし、マクロな流れなし

少数のマクロな変数（全エネルギー  $U$ ）を指定すれば、平衡状態は一意的に定まる

（分子数  $N$  と体積  $V$  は固定）

# 平衡状態 ミクロな視点

ミクロに見れば、エネルギー  $U$  の状態は無数にある

エネルギー  $U$  のミクロ状態すべて

$$(r_1, r_2, \dots, r_N, p_1, \dots, p_N)$$

全ての分子の位置  
と運動量

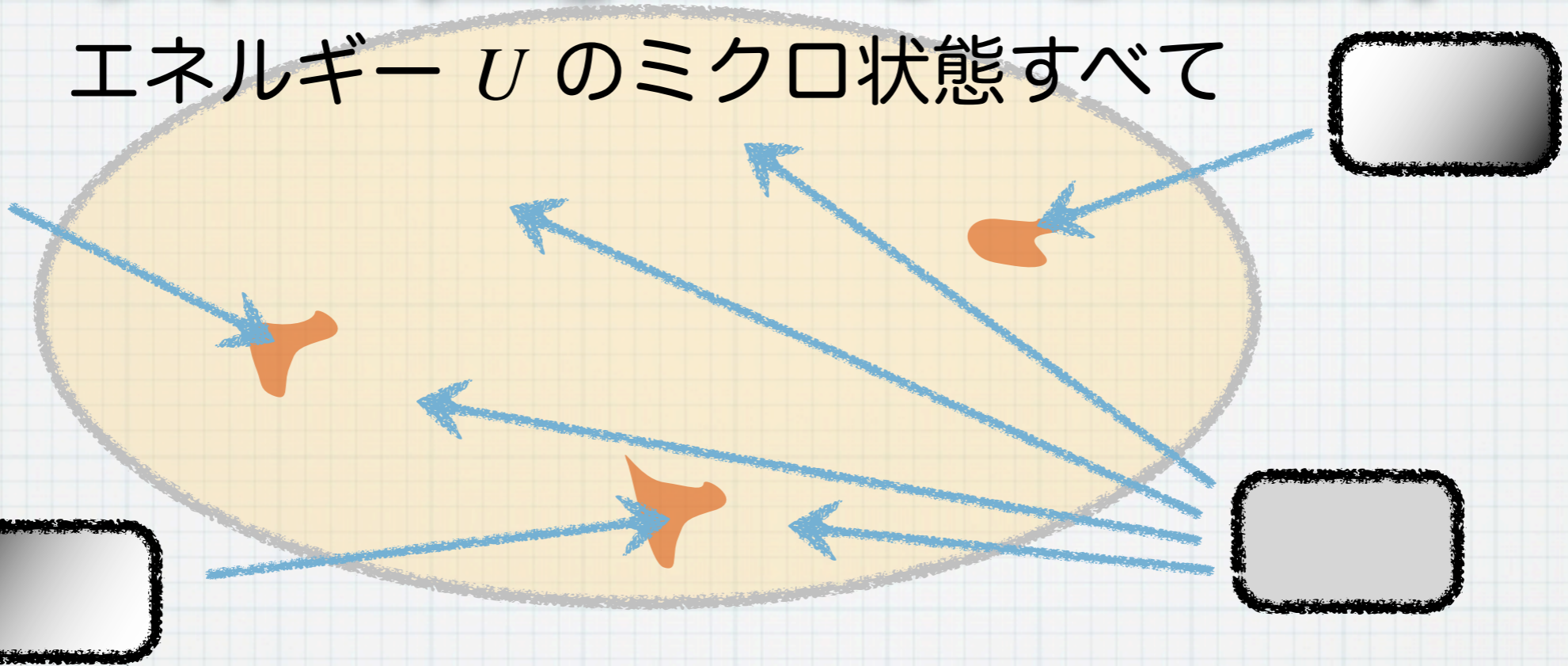
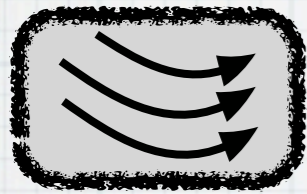
## 統計力学の処方箋 (等重率の原理)

すべてのミクロ状態が等しい重みで出現する確率分布 (ミクロカノニカル分布) が平衡状態を記述

何故、これでいいのか??

# 「典型性」による理解

エネルギー  $U$  のミクロ状態すべて



マクロな系では、エネルギー  $U$  のミクロ状態のほとんど全ては、マクロに見れば、そっくり

**平衡状態** そっくりなミクロ状態が共有する性質  
(一様平均すれば、この性質が見える)

**単一の (典型的な) ミクロ状態が平衡状態を表現しうる**

# 平衡への緩和の理解

エネルギー  $U$  のミクロ状態すべて



**非平衡状態**

少数の例外的な状態

緩和

**平衡状態**

大多数の典型的な状態

Humpty Dumpty sat on a wall,  
Humpty Dumpty had a great fall.  
All the king's horses and all the king's men  
Couldn't put Humpty together again

**緩和現象は、ダイナミクスの詳細によらず、きわめて普遍的に見られる（と期待される）**

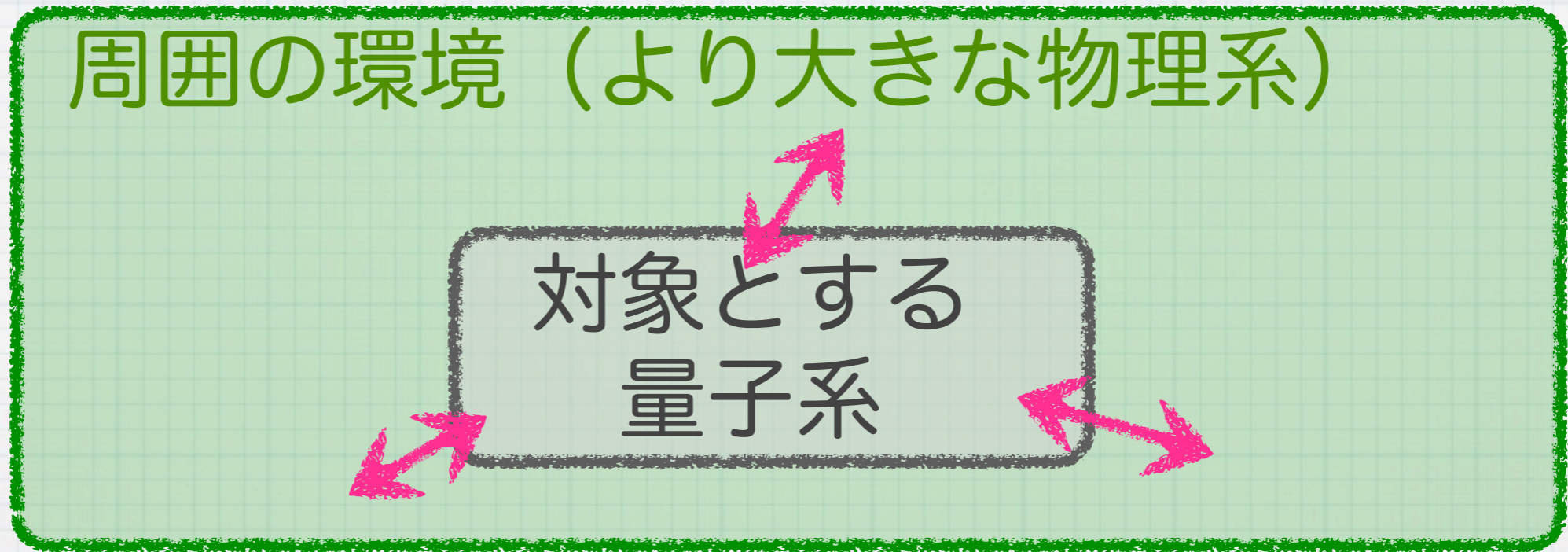
**設定**

**孤立系量子系**

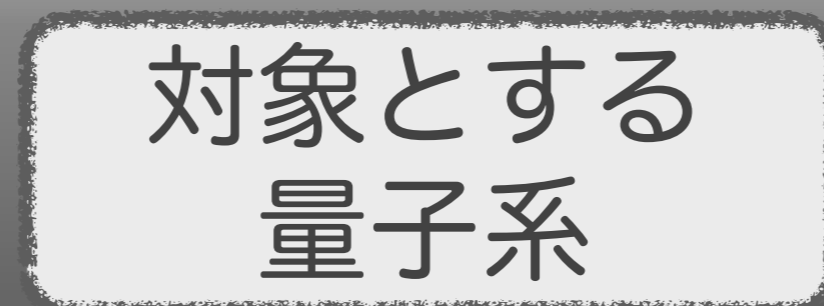


# 設定についての注意

## 通常の（現実的な）設定



## われわれの（明らかに非現実的な）設定

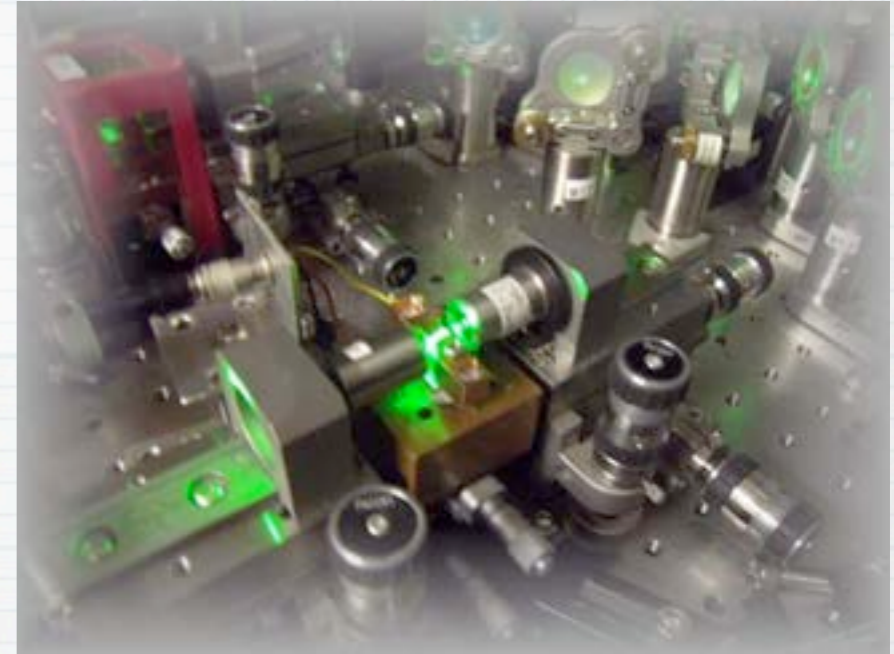


外界から完全に孤立

# なぜ孤立量子系か？

## 普通の（今風の）答え

冷却原子系で、理想に近い  
孤立量子系が実現できる  
 $10^7$  個の原子集団を  $10^{-7}$  K に冷却



## 私の（今風でない）答え

これは基礎的な研究で、まだ実際の応用からは限りなく遠い

孤立系では何がおこりえて、何がおこりえないのかをまず知りたい

その上で、必要に応じて、環境との相互作用が果たす役割を研究しよう

# ミクロカノニカル部分空間

全ヒルベルト空間  $\mathcal{H}_{\text{tot}}$       ハミルトニアン  $\hat{H}$

エネルギー固有状態  $\hat{H}|\psi_j\rangle = E_j|\psi_j\rangle$        $\langle\psi_j|\psi_j\rangle = 1$

マクロに見れば小さなエネルギー幅

$U - \Delta U \leq E_j \leq U$       任意のエネルギー（固定）

を満たす  $j$  に対応する  $|\psi_j\rangle$  が張る部分空間  $\mathcal{H}_U$

**ミクロカノニカル部分空間  $\mathcal{H}$**

$D$ 次元 ( $D \sim e^{\sigma V}$ ) 基底は  $|\psi_j\rangle$        $j = 1, \dots, D$

# 平衡状態の抽象的な扱い

ミクロカノニカル部分空間を「平衡の部分」と  
「非平衡の部分」に直和分解

$$\mathcal{H} = \mathcal{H}_{\text{eq}} \oplus \mathcal{H}_{\text{neq}}$$

射影演算子

$$|\varphi\rangle = (1 - \hat{P}_{\text{neq}})|\varphi\rangle + \hat{P}_{\text{neq}}|\varphi\rangle$$

$$\|\hat{P}_{\text{neq}}|\varphi\rangle\|^2 = \langle\varphi|\hat{P}_{\text{neq}}|\varphi\rangle \ll 1 \text{ ならば}$$

$$|\varphi\rangle \in \mathcal{H} \text{ は平衡状態を表わす } \langle\varphi|\varphi\rangle = 1$$

ミクロカノニカル部分空間  $\mathcal{H}$  次元  $D \sim e^{\sigma V}$

「非平衡」部分空間  $\mathcal{H}_{\text{neq}}$  次元  $d \sim e^{\tilde{\sigma} V}$

$d \ll D$  平衡状態の典型性  $\tilde{\sigma} < \sigma$   $V$  は体積

# 非平衡部分空間の具体例

一つのマクロな物理量  $\hat{A}$  に注目  $O(\hat{A}) = 1$

$\bar{A}$  ミクロカノニカル分布での  $\hat{A}$  の期待値

$\mathcal{H}_{\text{neq}}$  演算子  $(\hat{A} - \bar{A})^2$  の  $\delta$  以上の固有値に対応する固有状態の張る空間  $\delta \ll 1$

$$\langle \varphi | \hat{P}_{\text{neq}} | \varphi \rangle \ll 1 \longleftrightarrow \langle \varphi | (\hat{A} - \bar{A})^2 | \varphi \rangle \ll 1$$

状態  $|\varphi\rangle$  において物理量  $\hat{A}$  を測定すると、  
1 に近い確率で  $\bar{A}$  に近い値が得られる

**純粋状態  $|\varphi\rangle$  は平衡状態！**

# 時間発展と 平衡への接近

# 平衡への接近と緩和時間

初期状態  $|\varphi(0)\rangle \in \mathcal{H}$  時間発展  $|\varphi(t)\rangle = e^{-i\hat{H}t}|\varphi(0)\rangle$

いくつかの場合に

$\tau > 0$  について  $\frac{1}{\tau} \int_0^\tau dt \langle \varphi(t) | \hat{P}_{\text{neq}} | \varphi(t) \rangle \ll 1$

が示される

ほとんどの  $t \in (0, \tau]$  について  $\langle \varphi(t) | \hat{P}_{\text{neq}} | \varphi(t) \rangle \ll 1$

( $|\varphi(t)\rangle$  は平衡!)

$\tau$  は緩和時間の目安

例外 (非平衡)



# 平衡への接近に関する定理 (1)

energy eigenstate thermalization  
を仮定する定理

von Neumann 1929

Goldstein, Lebowitz, Mastrodonato, Tumulka, Zanghi 2010



各々のエネルギー固有状態が平衡！

$j \neq j'$  ならば  $E_j \neq E_{j'}$

すべての  $j = 1, \dots, D$  について  $\langle \psi_j | \hat{P}_{\text{neq}} | \psi_j \rangle \ll 1$

任意の  $|\varphi(0)\rangle \in \mathcal{H}$  と十分大きな  $\tau > 0$  について

$$\frac{1}{\tau} \int_0^\tau dt \langle \varphi(t) | \hat{P}_{\text{neq}} | \varphi(t) \rangle \ll 1 \text{ が成り立つ}$$



# 平衡への接近に関する定理 (2)

初期状態のエネルギー分布が少数の準位に集中していないことを仮定する定理

Tasaki 1998, Reimann 2008

Linden, Popescu, Short, Winter 2009

$U - \Delta U$

$j \neq j'$  ならば  $E_j \neq E_{j'}$

すべての  $j = 1, \dots, D$  について  $|\langle \psi_j | \varphi(0) \rangle|^2 \ll \frac{1}{d}$

十分大きな  $\tau > 0$  について

$$\frac{1}{\tau} \int_0^\tau dt \langle \varphi(t) | \hat{P}_{\text{neq}} | \varphi(t) \rangle \ll 1 \text{ が成り立つ}$$

(今回の話はこの定理とは直結しない)

# 証明

**初期状態**  $|\varphi(0)\rangle = \sum_{j=1}^D \alpha_j |\psi_j\rangle$   $\sum_{j=1}^D |\alpha_j|^2 = 1$

**時間発展**  $|\varphi(t)\rangle = \sum_{j=1}^D \alpha_j e^{-iE_j t} |\psi_j\rangle$

$$\langle \varphi(t) | \hat{P}_{\text{neq}} | \varphi(t) \rangle = \sum_{j,k} \alpha_j^* \alpha_k e^{i(E_k - E_j)t} \langle \psi_j | \hat{P}_{\text{neq}} | \psi_k \rangle$$

**長時間平均をとると**

準周期的 緩和しない

$$\lim_{\tau \uparrow \infty} \frac{1}{\tau} \int_0^\tau dt \langle \varphi(t) | \hat{P}_{\text{neq}} | \varphi(t) \rangle = \sum_j |\alpha_j|^2 \langle \psi_j | \hat{P}_{\text{neq}} | \psi_j \rangle$$

**energy eigenstate thermalization を仮定**

$$\leq \left( \sum_j |\alpha_j|^2 \right) \max_j \langle \psi_j | \hat{P}_{\text{neq}} | \psi_j \rangle = \max_j \langle \psi_j | \hat{P}_{\text{neq}} | \psi_j \rangle \ll 1$$

**初期状態がエネルギー分布をもつことを仮定**

$$\leq \left( \max_j |\alpha_j|^2 \right) \sum_j \langle \psi_j | \hat{P}_{\text{neq}} | \psi_j \rangle = \left( \max_j |\alpha_j|^2 \right) \text{Tr}[\hat{P}_{\text{neq}}] \ll \frac{1}{d} d = 1$$

# 証明 (続き)

長時間平均について  $\lim_{\tau \uparrow \infty} \frac{1}{\tau} \int_0^\tau dt \langle \varphi(t) | \hat{P}_{\text{neq}} | \varphi(t) \rangle =: \varepsilon \ll 1$

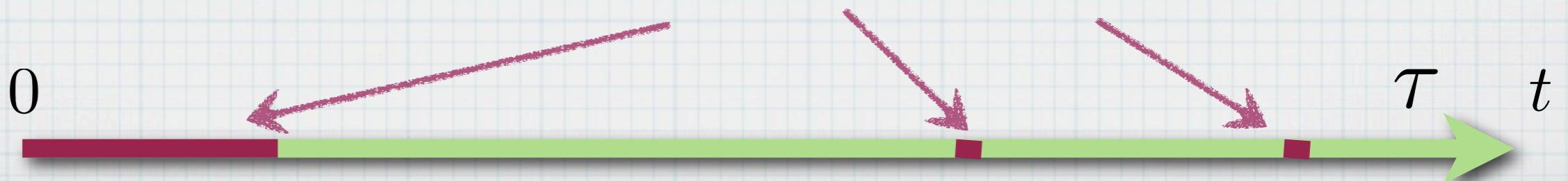
十分大きい  $\tau$  について  $\frac{1}{\tau} \int_0^\tau dt \langle \varphi(t) | \hat{P}_{\text{neq}} | \varphi(t) \rangle \leq 2\varepsilon \ll 1$

## 時間スケールの問題

この証明からでは、 $\tau$ をどれくらい大きく取れば十分なのかわからない

$\tau$  は緩和時間の目安

例外 (非平衡)



# 緩和の時間スケール

# 部分空間 $\mathcal{H}_{\text{neq}}$ についての注意

実際の物理系での非平衡部分空間  $\mathcal{H}_{\text{neq}}$  は  
着目する物理量などから自然に決まる

具体的な系で、あるいは一般的に、 $\mathcal{H}_{\text{neq}}$  を  
特徴づけるのは（今は）困難

→ 将来の課題

$\mathcal{H}_{\text{neq}}$  を  $\mathcal{H}$  の一般的な部分空間として扱う

ミクロカノニカル部分空間  $\mathcal{H}$       次元  $D$

「非平衡」部分空間  $\mathcal{H}_{\text{neq}}$       次元  $d$

$d \ll D$       平衡状態の典型性

# 異常に遅い緩和がありうる

**定理** energy eigenstate thermalization の仮定

を満たす  $d$  次元部分空間  $\mathcal{H}_{\text{neq}} \subset \mathcal{H}$  が存在し、

任意の  $|\varphi(0)\rangle \in \mathcal{H}_{\text{neq}}$  と  $0 < \tau \leq \frac{h}{12\Delta U} d$  について

$$\frac{1}{\tau} \int_0^\tau dt \langle \varphi(t) | \hat{P}_{\text{neq}} | \varphi(t) \rangle \geq \frac{3}{\pi} > 0.95$$

Goldstein, Hara, Tasaki, Phys. Rev. Lett. 111 (2013)

任意の  $|\eta\rangle \in \mathcal{H}$  に対して、 $|\eta\rangle$  を含む  $\mathcal{H}_{\text{neq}}$  が選べる

緩和時間  $\gg h d / \Delta U$

$d \sim e^{\tilde{\sigma} V}$  なので緩和にかかる時間はきわめて長い

数学的には、緩和時間が宇宙年齢より長い例が作れる

# 異常に速い緩和もありうる

**定理**  $d$ 次元部分空間  $\mathcal{H}_{\text{neq}} \subset \mathcal{H}$  が存在し、  
任意の  $|\varphi(0)\rangle \in \mathcal{H}$  と  $\tau > 0$  について

$$\frac{1}{\tau} \int_0^\tau dt \langle \varphi(t) | \hat{P}_{\text{neq}} | \varphi(t) \rangle \leq 6 \sqrt{\frac{\hbar}{\tau \Delta U}}$$

Goldstein, Hara, Tasaki, Phys. Rev. Lett. 111 (2013)

緩和時間  $\sim \hbar / \Delta U$

**これは一般にきわめて短時間**

しかも  $\Delta U \propto V$  とすれば系のサイズが大きいくほど  
緩和が速いことになる！

# 緩和の時間スケール？

$d$ 次元部分空間  $\mathcal{H}_{\text{neq}} \subset \mathcal{H}$  を（人工的に）作れば

緩和時間  $\gg h d / \Delta U$  **異常に遅い緩和**

緩和時間  $\sim h / \Delta U$  **異常に速い緩和**

**がある**

Goldstein, Hara, Tasaki, Phys. Rev. Lett. 111 (2013)

一般的な  $d$ 次元部分空間  $\mathcal{H}_{\text{neq}} \subset \mathcal{H}$   
に対応する緩和時間は？

もし一般的な部分空間に「まっとうな緩和時間」が  
対応するなら、現実的な部分空間に「まっとうな緩和  
時間」が対応する有力な裏付けになるだろう



# 「典型的」な系での緩和

$$d \ll D$$

Goldstein, Hara, Tasaki, 2014

$\mathcal{H}$  の  $d$  次元部分空間  $\mathcal{H}_{\text{neq}}$  をランダムに選ぶ

**定理** 1 に近い確率で以下が成立する

任意の初期状態  $|\varphi(0)\rangle \in \mathcal{H}$  について

$$\frac{1}{\tau} \int_0^\tau dt \langle \varphi(t) | \hat{P}_{\text{neq}} | \varphi(t) \rangle \lesssim \frac{\tau_B}{\tau}$$

Boltzmann 時間  $\tau_B := h / (k_B T)$

$$k_B T = \left\{ \partial \log \rho(U) / \partial U \right\}^{-1} \quad \rho(E) \text{ 状態密度}$$

$\tau \gg \tau_B$  ならば、系はほぼ完全に緩和する

$$T \sim 300 \text{ K} \longrightarrow \tau_B \sim 10^{-13} \text{ s}$$

ほとんど全ての量子系は  $1 \mu\text{s}$  以下で平衡化する！

# 典型的な系と現実の系

**「典型的な」量子系は  $1 \mu\text{s}$  以下で平衡化する！  
(系の詳細にも大きさにもよらない!!!)**

別の状況でも類似の速い緩和

Brandao et al., Cramer,  
Marabalba et al.  
Ikeda and Watanabe

**「典型的な」系と現実の系のふるまいは違う！**

この定理での  $\mathcal{H}_{\text{neq}}$

ランダムな  $d$  次元の部分空間

現実的な  $\mathcal{H}_{\text{neq}}$



われわれが興味をもっている物理量（多くは、  
局所的な保存量の和）の値に基づいて定まる


$d$  次元の部分空間

# 「典型性による論法」について

ほとんど全ての  で、 である



具体的な（現実的な） でも、  
（特別の理由がなければ） だろう

 少数多体系の  
モデルハミルトニアン

純粋状態

非平衡  
部分空間

 Wigner 半円則  
が成立

平衡状態を  
表現

一瞬で平衡に  
緩和！！！！

量子系における平衡への緩和に関しては、典型性を  
超えて、具体的な系の性質を研究する必要がある

# 典型的な系での緩和

$$d \ll D$$

Goldstein, Hara, Tasaki 2014

$\mathcal{H}$  の  $d$  次元部分空間  $\mathcal{H}_{\text{neq}}$  をランダムに選ぶ

**定理** 1 に近い確率で以下が成立する

任意の初期状態  $|\varphi(0)\rangle \in \mathcal{H}$  について

$$\frac{1}{\tau} \int_0^\tau dt \langle \varphi(t) | \hat{P}_{\text{neq}} | \varphi(t) \rangle \lesssim \frac{\tau_B}{\tau}$$

Boltzmann 時間  $\tau_B := h / (k_B T)$

$$k_B T = \left\{ \partial \log \Omega(U) / \partial U \right\}^{-1} \quad \Omega(E) \text{ 状態数}$$

$\tau \gg \tau_B$  ならば、系はほぼ完全に緩和する

$$T \sim 300 \text{ K} \longrightarrow \tau_B \sim 10^{-13} \text{ s}$$

ほとんど全ての量子系は  $1 \mu\text{s}$  以下で平衡化する！

# 証明の流れ (1/2)

初期状態  $|\varphi(0)\rangle = \sum_{j=1}^D \alpha_j |\psi_j\rangle$   $\sum_{j=1}^D |\alpha_j|^2 = 1$

時間発展  $|\varphi(t)\rangle = \sum_{j=1}^D \alpha_j e^{-iE_j t} |\psi_j\rangle$

$$\frac{1}{\tau} \int_0^\tau dt \langle \varphi(t) | \hat{P}_{\text{neq}} | \varphi(t) \rangle = \frac{1}{\tau} \int_0^\tau dt \sum_{j,k=1}^D \alpha_j^* \alpha_k e^{i(E_j - E_k)t} P_{jk}$$

$$= \sum_{j,k=1}^D \alpha_j^* Q_{jk} \alpha_k \leq \lambda_{\text{max}}$$

$Q_{jk} = P_{jk} S_{jk}$  Hadamard 積

行列 Q の最大固有値

ランダムな射影行列

$$P_{jk} = \langle \psi_j | \hat{P}_{\text{neq}} | \psi_k \rangle$$

時間平均行列

$$S_{jk} = \frac{1}{\tau} \int_0^\tau dt e^{i(E_j - E_k)t/\hbar}$$

# 証明の流れ (2/2)

$$Q_{jk} = P_{jk} S_{jk} \text{ Hadamard 積}$$

ランダムな射影行列

$$P_{jk} = \langle \psi_j | \hat{P}_{\text{neq}} | \psi_k \rangle$$

時間平均行列

$$S_{jk} = \frac{1}{\tau} \int_0^\tau dt e^{i(E_j - E_k)t/\hbar}$$

$\lambda_{\text{max}}$  行列 Q の最大固有値

$\mu_{\text{max}}$  行列 S の最大固有値

**定理** 1 に近い確率で  $\lambda_{\text{max}} \lesssim \frac{\mu_{\text{max}}}{D}$

**命題** 行列 S の最大固有値について  $\mu_{\text{max}} \lesssim D \frac{\tau_B}{\tau}$

これら二つから

$$\frac{1}{\tau} \int_0^\tau dt \langle \varphi(t) | \hat{P}_{\text{neq}} | \varphi(t) \rangle \leq \lambda_{\text{max}} \lesssim \frac{\tau_B}{\tau}$$

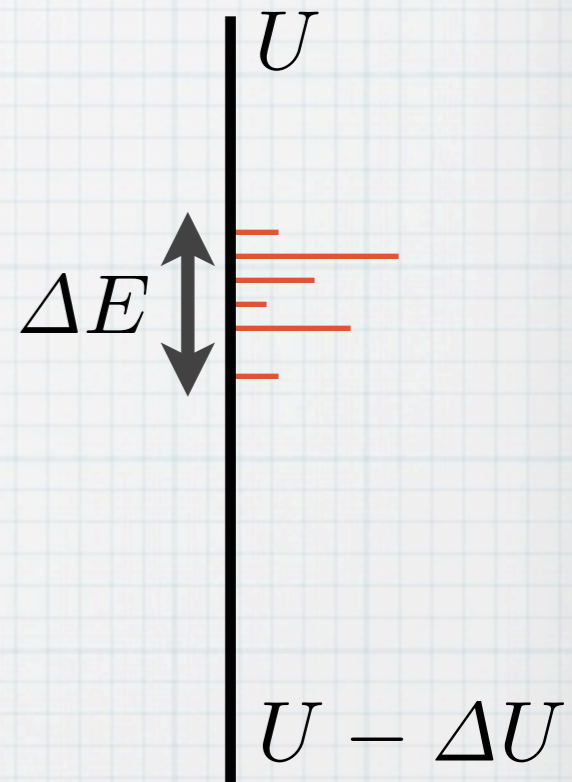
# 時間スケール を決める要因

# 一つの状態からの脱出時間

エネルギー幅  $\Delta E$  の任意の状態  $|\xi\rangle = \sum_{j=1}^D \xi_j |\psi_j\rangle$

$$E_j \in [\bar{E}, \bar{E} + \Delta E] \subset [U - \Delta U, U]$$

でなければ  $\xi_j$  は実質的に無視できる



時間発展する状態

$$|\varphi(t)\rangle = \sum_{j=1}^D \alpha_j e^{-iE_j t} |\psi_j\rangle$$

$|\xi\rangle$  との重なり

$$\langle \xi | \varphi(t) \rangle = \sum_{j=1}^D \xi_j^* \alpha_j e^{-iE_j t}$$

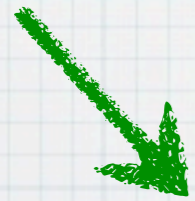
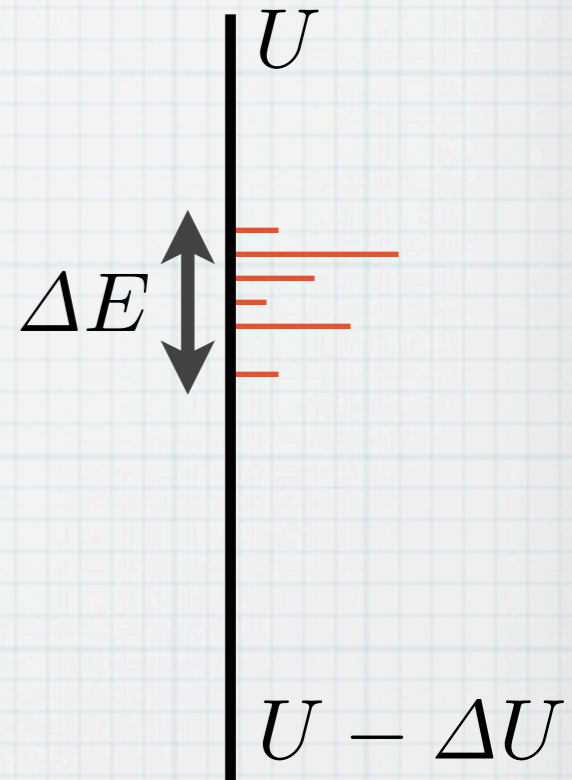


# 一つの状態からの脱出時間

$$\langle \xi | \varphi(t) \rangle = \sum_{j=1}^D \xi_j^* \alpha_j e^{-iE_j t}$$

$\Delta E$  以下

$$\left| \langle \xi | \varphi(t) \rangle \right| = \left| \sum_{j=1}^D \xi_j^* \alpha_j e^{-i(E_j - \bar{E})t} \right|$$



$\frac{\hbar}{\Delta E}$  程度の時間で変化

(「時間とエネルギーの不確定性関係」)

$|\xi\rangle$  の近傍から脱出するのに必要な時間  $\tau_{\text{esc}} \sim \frac{\hbar}{\Delta E}$

# 部分空間からの脱出時間（緩和時間）

$d$ 次元部分空間  $\mathcal{H}_{\text{neq}}$  の基底  $|\xi^{(1)}\rangle, \dots, |\xi^{(d)}\rangle$

各々の  $|\xi^{(j)}\rangle$  のエネルギー幅  $\Delta E$

**簡単なシナリオ 1**（これまでの例はこれにあてはまる）

$\mathcal{H}_{\text{neq}}$  からの脱出  $\longleftrightarrow$  一つの  $|\xi^{(j)}\rangle$  からの脱出

$$\text{緩和時間} \sim \frac{\hbar}{\Delta E}$$

**簡単なシナリオ 2**

$\mathcal{H}_{\text{neq}}$  からの脱出  $\longleftrightarrow$  複数の  $|\xi^{(j)}\rangle$  からの脱出

$$\text{緩和時間} \sim \frac{\hbar}{\Delta E} \times (\text{めぐる状態の個数})$$

**現実的な非平衡部分空間では???**

# 緩和の時間スケールについて

緩和時間が宇宙年齢よりも長くなるような部分空間  $\mathcal{H}_{\text{neq}}$  が存在する

遅すぎる！

現実はこちらら二つの定理の間にある  
われわれは未だ緩和の本質を理解していない

速すぎる！

典型的な  $\mathcal{H}_{\text{neq}}$  については、  
緩和時間はボルツマン時間のオーダー

# まとめ

**平衡状態 = 「マクロな系でのありふれた状態の共通の性質」という描像に基づき、孤立量子系での平衡状態への緩和を議論した**

**いくつかの仮定 (energy eigenstate thermalization, 初期状態のエネルギー分布) のもとで平衡状態への緩和があることを証明できる**

**緩和が異常に遅い例、異常に速い例を人工的に作る  
ことができる**

**「典型的」な非平衡部分空間については、緩和に必要な時間はボルツマン時間のオーダーである**